

子どものゲーム・ネット依存 現状と課題

一 竹内 和雄 (たけうち かずお)
兵庫県立大学環境人間学部 准教授

不登校とスマホの普及

子どもたちに急激な勢いで、ゲーム・ネットが浸透しています。その影響はいろいろなところにあらわれていますが、本稿ではその影響が最も出ているものの一つとして、不登校に着目してみます。まずは二つのグラフを見てその関連を考えてみてください。

図1は中学生の不登校数の推移です。平成24年を底に減少から増加に転じています。平成24年、子どもたちに何が起こったのでしょうか。少子化、ひとり親家庭の増加、教員の指導力低下など、様々な要因が述べられています。複合的に絞ることはもちろんできませんが、私はその一つにスマートフォン

(以下、スマホ)の普及があると考えています。図2は、内閣府の調査を元にして私が作ったグラフですが、平成24年頃から一気に普及しているのが見て取れます。私は元中学校教員で、現在は大

「えた」という声がよく聞こえます。

先生方の声

先日、4人の先生方に集まってもらって、先出しの二つの図の感想を話してもらいました。

A氏(50代男性 小学校勤務)
B氏(30代女性 小学校勤務)
C氏(40代男性 中学校勤務)
D氏(40代女性 中学校勤務)

——の4名です。

①不登校生の変化

詳しい時期はわからないが、以前と比べて不登校生が変わっています。変化を図示したのが7ページの表1です。

これらの変化にはインターネット(以下、ネット)、特にスマホが関わっています。

以前の不登校生は、漫画は読み飽きてしまった。ゲームは一度クリアすると興味は半減してしまう。昼間のテレビは昼メロやワイドショー等、子どもにはおもしろくない。友達もいない——ので、昔の不登校生の生活はどちらかというと

図1：不登校中学生の推移 (文部科学省2020)



図2：スマートフォン所持率(%)の推移 (内閣府2014)

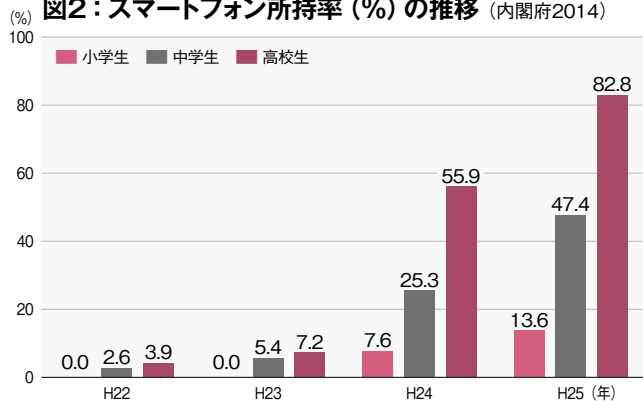


表1：不登校生の変化

	以前の不登校生	今の不登校生
漫画	読み飽きてしまった	漫画サイトに無数にある
ゲーム	クリアしてしまった	オンラインゲームが無尽蔵に
テレビ	昼間はおもしろくない	ユーチューブがある
友達	ほぼいない	ネット友達がいる

暗く、おもしろくないものでした。そのおもしろくないさが彼らの登校再開への大きな要因の一つになっていました。私も中学校で生徒指導主事としてそういう子どもたちに多く関わりましたが、クラスの子の手紙を手渡ししたり、級友を連れていたりすると、恥ずかしがりながらも大喜びしていたものです。

今の不登校生は事情が違う場合が多いです。漫画はネット上に無尽蔵にあります。オンラインゲームがたくさんあるので、飽きることはありません。また多刻々とゲーム内容が更新され、対戦相手も生身の人間が操作したアバターだったりするので、興味が尽きることはありません。また多くのゲームでは数人でチームを組んで、「ボイスチャット」といわれる機能（これを使うとしやべりながらゲームできる）を使って協力しながら

ら進めるので、友達との交流も実は盛んです。さらにSNS等と同じ趣味の人たちと交流ができたりますので、彼らにそういうネット上の「友達」がたくさんいることがめずらしくありません。

② 寂しい心の逃げ場としてのネット

先生方から頻出の言葉は、「ネットが悪いわけではない」です。「寂しい心の逃げ場としてネットが選ばれている」と言います。

日本中で校内暴力の嵐が吹き荒れた時代には、「寂しい心の逃げ場」は、多くの場合、いわゆる「不良グループ」「暴走族」等でした。コンビニの駐車場に変形学生服を着た中高生がたむろしていました。今、「不良グループ」も「暴走族」も「コンビニにたむろする中高生」も見かけなくなりました。先生方は、そういう子どもたちの逃げ場がネットになってしまっていると言います。熟さない言葉ですが、「被承認欲求」の高い子、つまり認めてほしい子どもたちがネットに救いを求めている印象を私も持っています。

これからのために

GIGAスクール構想で、小学1年生が自分専用の情報端末を持って学習していきます。昔はネットやスマホを使わせることを躊躇する大人も多かったもの

事実です。しかし、これからの高度情報化社会を生き抜いていく彼らはネットなしでは無理でしょう。どちらかと言えば、早い時期から習熟していく必要があるでしょう。しかし、今回一例として見てきた不登校のように、ネットが誘発している可能性がある課題への対策が急務です。他には高額課金、ネット上の出会い、情報漏えい、ネットいじめなど枚挙に暇がありません。

これまで子どもとネット問題は100か0かで論じられることが多かったです。制限なしで子どもたちに自由に使わせる1000派。これは無責任です。そういう人たちは「早いうちからネットを自由に使わせて、けがをしながらい方覚えていけばよいのだ」と主張しますが、ネットで負うけがは一生背負っていくかなければならないほど大きな場合があります。1000派はあまりに無責任です。

一方、全く使わせない0派も多いです。これも無責任です。ネットを使えないまま大人になったら、これからの高度情報化社会を生きていけません。リアル社会とは全く違う作法、流儀があります。それを少しづつ身に付けていくことが大人になるためには必要です。私たち大人は、30なのか80なのか、50なのか、社会全体で考えていかなければなりません。私は教育の

世界から子どもたちと関わっていますが、本誌の読者は消費者問題に精通している方々だと聞いています。そういう方との協働の必要性を強く感じています。

私は最近、ユニセフと関わっています。令和元年度、ユニセフと一緒に、全国5カ所の子どもたちとネットの使い方について話し合いました。ユニセフのネット問題への認識は素晴らしく、共感しています。ユニセフの正式なスタンスかどうかわかりませんが、ある担当者は「ネットは道路と同じだ。使わなければ事故は起きないが、使わせなければいけない。さらに重要なのは、交通ルールを子どもに守らせたとしても事故は起きている。ネットも同じだ」と話しておられました。

私たちの社会は、交通事故のリスクがあるにも拘らず、子どもたちに道路を使わせています。もちろん、道路交通法を整備し、交通安全のための教育も充実させてきました。しかし残念ながら毎日、交通事故で亡くなる方がいます。

ネットはどうでしょうか。まだネットを使っている人ばかりは少数です。今しっかりと整備しておかなければ、もしかしたら将来、交通事故で亡くなるくらい数の死者や事故に巻き込まれる人が増えてしまうかもしれません。私たちは今、岐路に立っています。試されているのは私たち大人です。